

KSC 開校 15 周年記念特別講演会  
『愛し愛されての人生  
= 今にいきる賀川豊彦』

神戸市シルバーカレッジ開校 15 周年を記念し、カレッジが主催し、グループ“わ”と KSC 同窓会が共催して去る 11 月 16 日カレッジホールで、神奈川県立保健福祉大学名誉学長阿部 志郎先生（「賀川豊彦献身 100 年記念事業」東京プロジェクト実行委員長）をお招きして特別講演会が神戸プロジェクト実行委員長の今井学長の開会挨拶で開催された。

講演要旨 (松本容子教務リーダー記)

第一の時期 愛される

こどもは愛されるべき存在として生まれてくる。愛されてこそ愛する人になるといわれるが、賀川豊彦は神戸市で生まれ、幼くした両親を亡くし、賀川家に引き取られている。

第二の時期 愛する

弱い人、異質の人を排除する傾向は昔も今も同じだが、賀川豊彦は違った。21 歳の時、結核で余命いくばくも無いと診断され、その命を隣人に捧げようと神戸市のスラムに入る。それはクリスマスの時で来年献身 100 年を迎える。そこは、二畳一間に 5~7 人家族が住み、トイレは 20 軒に一つだった。スラムの人々のたくましさを知り、必要なのは救貧でなく、お互いに自主的に助け合い、生きる道を目指していくことだと考え、それを実践していく。

第三の時期 再び愛される

晩年の自立とは、最後まで人生の完成を目指して、人生の山を登り続けることであり、愛されるとは、その自立を支援されることである。その先に死がある。賀川豊彦は、死ぬ間際まで活動を続け、徳島で伝道中に倒れた。

賀川豊彦から学ぶこと、それは「助け合い、支えあうことの大切さ」である。私たちには、21 世紀を平和と愛に満ちた世紀にするために、若い人、子どもたちに伝えていく責任がある。(以上)



“不思議な縁の結びつき”

司会 (福10-東) 芳賀 順子

2008 年 11 月 16 日、カレッジホールはほぼ満席の中、神奈川県立保健福祉大学名誉学長・阿部志郎先生をお迎えして、貴重な話を拝聴した。お姿からは 80 歳を超えた方とは思えぬ精悍な眼力と隅々まで響く張りのある声、澁み無く立て板に水が流れるような話しぶり、休憩も取らず 90 分の講演はアツと言う間に過ぎて、出席された皆様の心に残すだけでは惜しい様に思いました。世界の国々を回られた豊かな経験と明確な論旨で、鋭く迫って来る話の内容は、広く深く示唆に富んでいました。

「<sup>たらい</sup>盥から <sup>たらい</sup>盥に移るチンプンカン」小林一茶

混沌とした人生の中母親の愛に触れる事の大切さを説く事から話は始まりました。人は産湯に浸かり湯灌式で沐浴して次の世に旅立つ。インドの難民テント村を訪ねた時に大切な飲み水で子供の体を洗う母親に眩しい姿を感じたといいます。自分は食わずとも家族に食べさせる母。帝国ホテルの料理長に訊ねた時に言われるには、一番美味しい料理とはお袋の味だという。またタイ国は不登校の子供が居ないという。それは母親がしっかりと子を育てているからであろう。一人の孤児に 100 人のボランティアの手が差し伸べられ、市民が親代わりに子供を育てる。その様な社会が成熟した社会と言えましょう。

「白金も黄金も珠も何せんに勝れる宝子にしかめやも」と山上憶良により万葉の時代から詠われている。

日本の家庭の根底にはこの様な精神が在ったはずです。岡山で次々と孤児を預かり養育をした「石井十次」の、日本初の孤児院の話をして、その徳を讃えられました。

賀川豊彦は、愛されなかった子供時代がありましたが、賀川を愛した宣教師のマヤス夫妻がいました。賀川は、人を信じる事を学び、神を信じました。そして誰にも増して人を愛する人になりました。人に愛された人は、人を愛する人になります。人間は自分を最も愛しているものですが、自分を大切に出来る人は、人をも大切に出来るものです。神戸のスラムの中に賀川豊彦は若き身を投じて、スラムの人々を救い共に生きる事を選ばれました。

「死線を越えて」の本の印税全てをスラムの再生に使いました。賀川の献身は「涙の 2 等分」にも書かれています。賀川豊彦は人々が出資しあって、共同組合を作り皆で助け合って生活を高めていくこと

(次ページに続く)